

第Ⅺ部

否定(4) 否定的各种话题

此前的章节中已经考察了关于否定的基本内容。下面我们考察几个与否定相关的话题。

第33章：探讨要求订正部分构造的“～んじゃない”，导出使用这个形式时应遵循的原则。

第34章：探讨直接与否定属性相关(表示程度)的客体。展示“全然”“絶対”“完全”两个类型的构造，同时涉及与否定属性无关的“はっきり”“かすか”两个类型的构造。

第35章：在考察表达数量的实体与否定的关系后，探讨“～しか～ない”“～しはしない”“～することはない”的构造。

第 33 章 要求订正部分构造的否定“～んじゃない”

33.1 要求订正推断句的某一部分

会话中可以有以下一段对话：

①A：きょうは彼，いい時計してるだろ。

②B：そうだね。

③A：彼，きのう新宿へ買い物に行つてね。

④B：ああ，それで。

⑤A：あつ，ちがう，ちがう。_____。

A 打算在画线部分说什么呢？有以下几种可能性：

あの時計は新宿で買ったんじゃない。

あの時計は買ったんじゃない。

あの時計は新宿じゃない。

あの時計はきのう買ったんじゃない。

あの時計は彼が買ったんじゃない。

A 打算在画线部分说什么呢？

从 B 的会话中推测，应该是使用④做出“彼はきのう新宿で時計を買った”的判断。这时，B 会从状况中推测构建一个判断的构造。

我们把 B 在这里进行推测而产生的判断叫作“推断”。然后，将使用这种“推断”的句子叫作“推断句”。

实际上，A 察觉了 B 以④做出了推断句，所以想用⑤向 B 传达那个判断句是错误的。

如果只是想传达其判断不对，会说：

⑤A：あつ，ちがう，ちがう。そうじゃない。

但是，如果现在 A 是想告诉 B 其所做的判断句哪里不对，又会怎样呢？这种情况，A 会在⑤的画线处，使用要求对 B 的推断句中某个特定部分进行订正的表达。

假设现在 A 想要进行“時計は買ったのではない。(もらったのだ)”这样的订正。这时，如果说“時計を買ったんじゃない”，A 就达不到目的。因为这

个句子要求的是对“時計”的订正。此时的意思是：“時計を買ったんじゃない。(→電子手帳を買ったんだ。)”

那么，怎样做才正确呢？有什么规则吗？怎样做才能够进行正确的订正要
要求呢？为了明确这一点，我们探讨一下推断句的描述法。

33.2 订正部分构造的过程

如果把表示推断的构造叫作“推断构造”，推断句“彼が新宿で時計を買った”的推断构造就如图 33-1、图 33-2 所示。

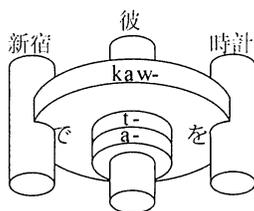


图 33-1 彼が新宿で時計を買った

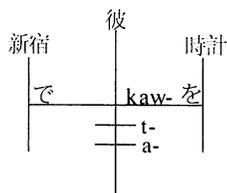


图 33-2

为在对方的推断构造中添加部分订正，说话人首先要把这个推断构造纳入包含实体“の”中(图 33-3)，然后再向“～でない”构造的“で格”中放置“の”包含实体，使其整体变为“～のではない”的构造(图 33-4)。(同样，如果纳入包含实体“わけ”中，就会成为“～わけではない”。)

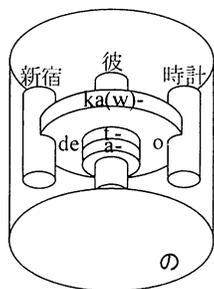


图 33-3 [彼が新宿で時計を買った]の

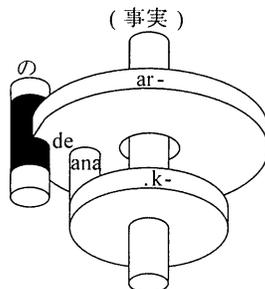


图 33-4 ～のではない

于是，这里就可以形成“[彼が新宿で時計を買った]のではない”的“～
のではない”句。

这个“～のではない”构造不能特定主体是什么。如果硬要找出主体，可
以说主体是“事实”吧。

(事实は)[彼が新宿で時計を買った]のではない

包含客体的“の”通过“は”变成了对比客语，也就是说，它变成了否定的原因要素[28.1(3)]，所以如果把它换成别的客体，就会偏离否定属性 -(a)na. k-，从而有可能使全体变为肯定构造。

换成别的客体是通过更换包含实体“の”内的一部分(新宿→渋谷)等来实现的。

(事实は)[彼が渋谷で時計を買った]のである。

“～のではない”在口语中变为“～んではない”，所以后来就使用“～んじゃない”的形式。“～わけではない”的情况是变为“～わけじゃない”。

33.3 什么会成为要求订正的对象

在这个推断构造中有可能成为订正对象的要素有 4 个：

主 体：“彼”

客 体：“新宿”“時計”

动属性：“買った”

虽然是要求订正其中之一要素，但这些要素之间也有替换容易度的差别。当把主体“彼”换成选择主语“彼が”时，形成“彼が新宿で時計を買ったんじゃない”时，最容易替换的是选择主语“彼が”。

→ 彼女が新宿で時計を買ったんだ。

如果把选择主语的位置更换一下，就可以看出选择主语并非一定是句首语(这里的“が”不是现象主语的“が”)。最自然的句子，仍然是更换选择主语。

新宿で彼が時計を買ったんじゃない。

時計を彼が新宿で買ったんじゃない。

在日语中有这种倾向，即选择主语优先于其他要素成为订正的对象。

我们将变换为难易程度叫作“可换性”。如果把可换性的程度用分数来表示，那么下面的分数(作为经验值)比较妥当：

选择主语—— 4

句、节—— 3

客语—— 3

谓语句—— 2

主题语、话题语—— 0

如果有强调—— +1.5

选择主语最容易更换，所以是 4 分。句、节(包括事象主语、逻辑客语)

和宾语都是3分。谓语很难更换，所以是2分。因为主题语、话题语是针对其本身进行叙述的要素，不能更换，所以是0分。如果有被强调的词语，其可换性会增高，所以加1.5分。

下面，我们尝试给“～んじゃない”中的各要素配置分数，分数最高的是订正的对象(使用黑体字表示强调)。

例如：

彼は 新宿で 時計を 買った んじゃない。

上句中最高分4分的“時計”会成为订正的对象。

新宿では 彼 時計 買った んじゃない。

上句中“新宿”是主题，“彼”和“時計”是话题。订正对象必然成为“買った”(→“拾った”)。

下面，我们使用原则的形式对什么会成为订正对象进行考察。句前“[]”中的数字为可换度分数。

原则1 如果只描述推断构造中的一个要素，该要素为订正的对象。

(没有动属性描述的时候不使用“～んじゃない”，使用“～じゃない”。)

[4] 彼がじゃない。 (→彼女がである。) 图 33-5

[3] 新宿(で)じゃない。 (→渋谷(で)である。) 图 33-6

[3] 時計(を)じゃない。 (→靴(を)である。)

[2] 買ったんじゃない。 (→拾ったのである。) 图 33-7

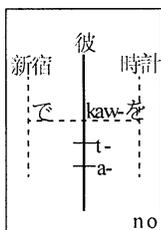


图 33-5 彼じゃない

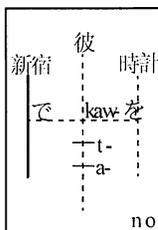


图 33-6 新宿(で)じゃない

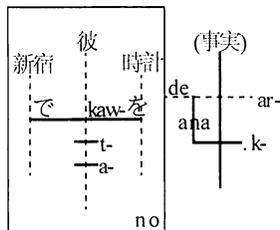


图 33-7 買ったんじゃない

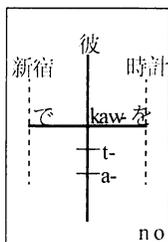
在构造图示中，用实线表示描述为语言的要素，用粗线表示需要成为订正对象的要素，用虚线表示没有被描述的要素。省略“～んではない”中“は”的修饰形表示。

原则2 即使在原则1的一个要素上添加动属性(2分)描述，这一个要素仍然是订正的对象。

[42] 彼が買ったんじゃない。 (→彼女が買った。) 图 33-8

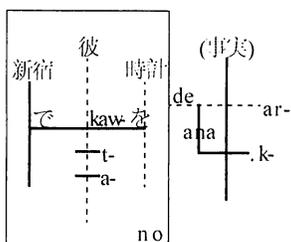
[32] 新宿で買ったんじゃない。 (→渋谷で買った。) 图 33-9

[32] 時計(を)買ったんじゃない (→靴を買った。) 图 33-10



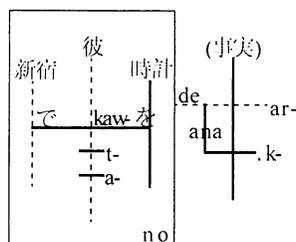
彼が買ったんじゃない

图 33-8



新宿で買ったんじゃない

图 33-9



時計(を)買ったんじゃない

图 33-10

原则 3 主题、话题不能成为订正的对象(0分)。所以，即使在原则 1、原则 2 的句子上添加主题、话题，这一个要素仍然是订正的对象。

[03] 時計(は), 新宿(で)じゃない。(→渋谷)

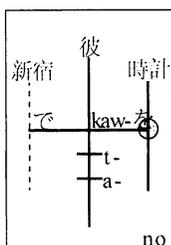
[042] 時計(は), 彼が買ったんじゃない。(→彼女) 图 33-11

[032] 彼(は), 時計を買ったんじゃない。(→靴) 图 33-12

[0032] 新宿で(は), 彼(は), 時計を買ったんじゃない。(→靴)

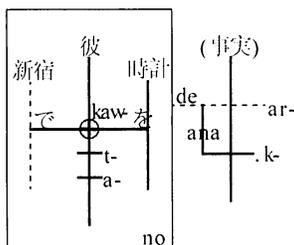
[02] 新宿で(は), 買ったんじゃない。(→拾った)

[002] 彼(は), 時計(は), 買ったんじゃない。(→拾った) 图 33-13



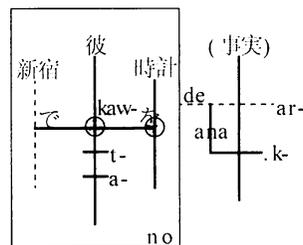
時計は彼が買ったんじゃない

图 33-11



彼は時計を買ったんじゃない

图 33-12



彼は時計は買ったんじゃない

图 33-13

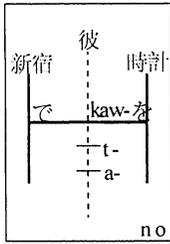
原则 4 没有描述主语或者是主语成为主题、话题的时候，有强调(+1)的要素是订正的对象。当谓语成为订正对象的时候，有必要放置一个 0 分的要素用以强调谓语。

[3+1.5,32] 新宿で時計(を)買ったんじゃない。(→渋谷) 图 33-14

[03,3+1.5,2] 彼(は), 新宿で時計(を)買ったんじゃない。(→靴) 图 33-15

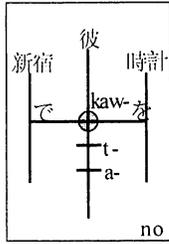
[033,2+1.5] 彼(は), 新宿で時計(を)買ったんじゃない。(→拾った) 图

33-16



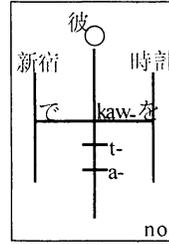
新宿で時計を〜

图 33-14



彼は新宿で時計(を)〜

图 33-15



彼, ~買った〜

图 33-16

原则 5 如果有选择主语，则选择主语是订正的对象。

[4332] 彼が新宿で時計を買ったんじゃない。(→彼女)图 33-17

[0342] 時計は新宿で彼が買ったんじゃない。(→彼女)图 33-18

[3431] 新宿で彼が時計を買ったんじゃない。(→彼女)图 33-17

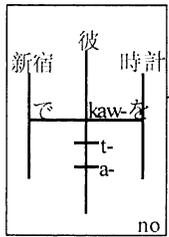


图 33-17 彼が〜

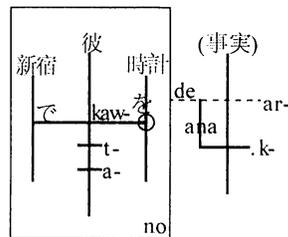


图 33-18 時計は彼が〜

原则 6 将成为构造要素的部分各种实体及实体与属性的连接作为一个整体的描述单位(句子)来处理，有时需要遵循原则 1~5。

下面列举包含属性的事象主语及逻辑宾语例句。所谓不包含属性的描述单位(句)，是“彼の時計”“白い時計”“新宿(で)の時計”这样的句子。

现象主语的时候——新宿で時計を[彼が買った]んじゃない。

原则 1 [3] [彼が買った]んじゃない。(→彼女が拾った。)

原则 2 (这种时候，动属性的描述已经包含在原则 1 中。)

原则 3 [03] 時計は[彼が買った]んじゃない。(→彼女が拾った。)

原则 4 (这种时候，主语已经作为事象主语出现。)

原则 5 (这种时候，主语不能单独处理。)

逻辑宾语的时候——彼は新宿で[時計を買った]んじゃない。

原则 1 [3] [時計を買った]んじゃない。(→映画を見た)

- 原则 2 (这种时候, 动属性的描述已经包含在原则 1 中。)
- 原则 3 [03] 新宿では[時計を買った]んじゃない。(→映画を見た)
- 原则 4 [033+1.5] 彼, 新宿で[時計を買った]んじゃない。
(→映画を見た) 图 33-20
- 原则 5 [433] 彼が新宿で[時計を買った]んじゃない。(→彼女が買った)

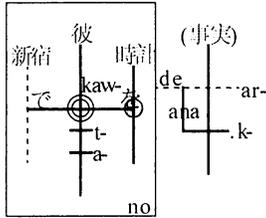


图 33-19 時計は[彼が買った]~

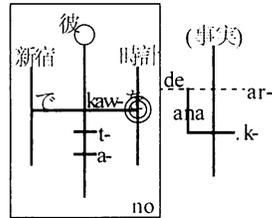


图 33-20 彼, 新宿で[時計を買った]~

原则 7 当推断构造是否定构造、其属性成为订正对象的时候, 正确的订正不是把动属性换为其他成分, 而是去掉否定属性 $-(a)na.k-$, 使其变为肯定。

彼, 新宿で時計を 買わなかった んじゃない。[033, 2+1.5]

彼, 新宿で時計を kaw-[ana.k-θ=ar-]i=t-θ=a-θ んじゃない。图

33-21

→ 彼, 新宿で時計を kaw-[]i=t-θ=a-θ んだ。图 33-22

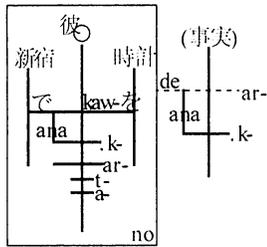


图 33-21 ~買わなかったんじゃない

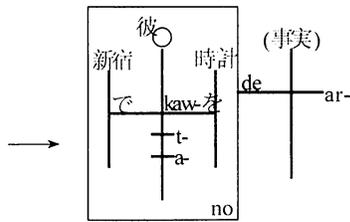


图 33-22 ~買ったんだ

33.4 正确的订正方式

原则如上。

那么, 之前的 33.1 的 A 说“時計を買ったんじゃない”的时候, 之所以会成为订正“時計”的要求, 是因为根据原则(1和)2, 订正对象成了[32]。

此外，根据原则 6，也可以看出，这个案例有可能成为“時計を買った”整体的订正要。([3]→パソコンを修理に出したんだ。)

因为 A 想订正“買った”，所以遵循原则 1 只说“[2] 買ったんじゃない”就可以。如果想把“時計”这个词语也放进去，根据原则 3，把“時計”作为主题或话题后加入就可以。

[02] 時計は買ったんじゃない。

[02] 時計、買ったんじゃない。

如果无论如何也想说“時計を”，则可以根据原则 4，加入某个主题或话题，把“買った”放到强调的位置就可以。

[03, 2+1.5] 彼は時計を買ったんじゃない。

[03, 2+1.5] 彼，時計を買ったんじゃない。

[03, 2+1.5] 新宿では時計を買ったんじゃない。

神への愛(格的代用)

针对“神への愛”的构造展开思考，会遇到一些问题，因为原来的构造是“私₀₁は神を愛する”，而不是“神へ愛する”。“愛する”的构造是“愛(を)する”形态的“不描述格的合并”。由于日语的经济性原理中有尽量不(没有必要)将重要的格描述在表层的原则，所以就会成为“神~~が~~の愛”“ワイン~~を~~は飲む”“そこ~~に~~のペン”。因此，如果把“神を愛(を)する”的两个实体“神”和“愛”用ノ连接(36.1)，就会成为“神~~を~~の愛”，这在形态上和“神~~が~~の愛”一样。所以，我们可以使用“ノ连接”描述，并作为代替而使用表示方向的格词“へ”，以“神への愛”的形式来防止意思的混乱。当然，构造也就成了“神へ愛を寄せる”。

这是从“ノ连接”产生的“格的代用”(构造的代用)。

第 34 章 与否定属性直接相关的客体

34.1 与否定属性直接相关的客体——“全然”

表示程度的词语中有“全然”这一实词。如“彼 \emptyset_1 酒は全然 \emptyset_2 飲まない”所示，“全然”一定用于否定，而非用于“彼 \emptyset_1 酒は全然 \emptyset_2 飲む”这样的肯定说法。（目前不考虑俗语的说法）

同样是实词的“酒”，在构造上作为客体与动属性关联。而实词“全然”则与否定属性 -(a)na. k- 有关联(图 34-1、图 34-2)。然而，否定构造仅凭这两者是不能存在于构造上的[26.3(5)]，与否定属性有关联也就意味着与“动属性+否定属性”(nom-ana. k-) 的整体有关联。

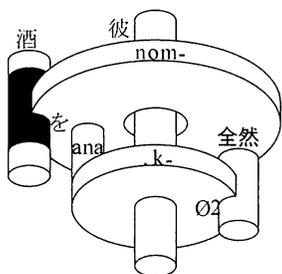


图 34-1 彼，酒は全然飲まない

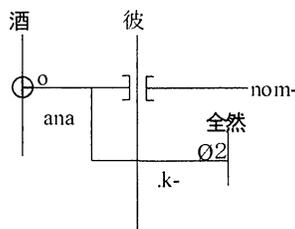


图 34-2

如图 34-1、图 34-2，“全然”这个实体，在构造上成为与否定构造有直接关联的客体。因此，我们把实体和否定构造直接关联的构造叫作“ない关联否定”。

34.2 在某些情况下与否定属性直接相关的客体(1) ——“絶対”

“絶対”这个实词和“全然”有一些不同，它有时也可以和动属性相关联。如“彼 \emptyset_1 酒は絶対 \emptyset_2 飲む”的构造中，“絶対”是和动属性相关的(图 34-3、图 34-5)。再如“彼 \emptyset_1 酒は絶対 \emptyset_2 飲まない”的构造中，“絶対”与否定属性 -(a)na. k- 相关联，从而形成“ない关联否定”(图 34-4、图 34-6)。

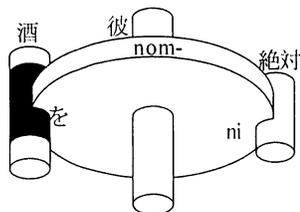


图 34-3 絶対 0 に飲む

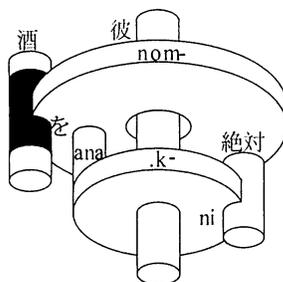


图 34-4 絶対 0 に飲まない

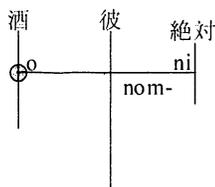


图34-5 絶対 0 に飲む

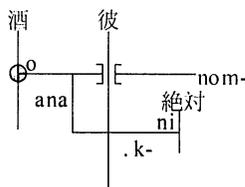


图 34-6 絶対 0 に飲まない

但是，与动属性相关联的不是否定的语境，而是肯定的语境。

34.3 在某些情况下与否定属性直接相关的客体(2)——“完全”

“完全”这个实词和“絶対”一样，可以与动属性或否定属性中的任意一个相关联。

それが完全にわかる。(图 34-7)

それが完全にわからない。(=全然わからない 图 34-8)

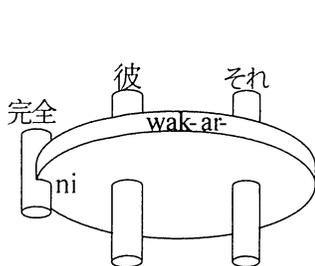


图 34-7 完全にわかる

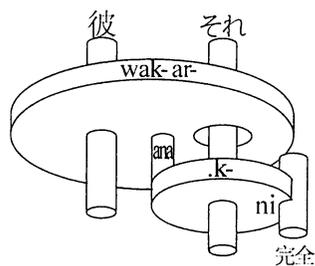


图 34-8 完全にわからない

关于“わかる”的两个主体是复数主体的问题，可参照 12.3。

但是，与“絶対”不同的是，“完全”在与动属性相关联的情况下也可以进行否定。特别是在“完全”这个客体上添加“は”使其变为对比宾语[28.1(3)]

时，这个特点更加明显。

それが完全にはわからない。(=80%わかる 图 34-9)

上句的语气暗示了应该有对比的构造。例如图 34-9 把客体作为对比对象的“不完全”肯定构造[28.1(3)]。“それが不完全にわかる”就是图 34-9 的构造所表示的意思。

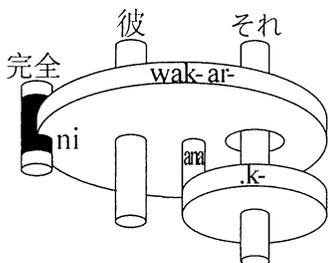


图 34-9 完全にはわからない

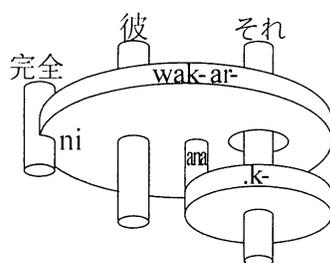


图 34-10 完全にわからない

但是，如果不把“完全”作为对比宾语（也就是说不附加“は”），而是以逻辑宾语[28.1(4)]描述该句，则会成为“それが完全にわからない”。（图 34-10）

这与图 34-8 的构造中描述的句子一样，具有双重意义。不过，如果在描述图 34-10 构造的句中添加“まだ”，或仔细分析，还是可以确定句子的真正含义。

如“完全”的构造(图 34-10)所示，我们把这种和动属性直接关联并与否定属性共存的构造叫作“属性关联否定”。

关于否定，“全然”和“绝对”是与否定属性 -(a)na.k- 直接有关联的“ない关联否定”的客体，而“完全”不仅是“ない关联否定”的客体，也是和动属性直接关联并与否定属性共存的“属性关联否定”的客体(参照表 34-1)。

34.4 不与否定属性直接相关的客体——“はっきり”“かすか”

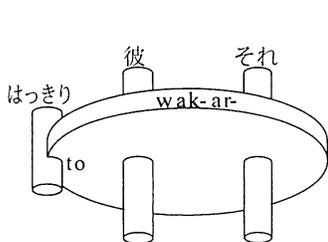


图 34-11 はっきりわかる

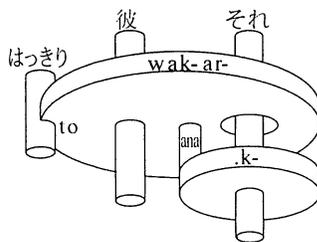


图 34-12 はっきりわからない

因为“はっきり”这个实体与动属性相关，所以“それがはっきりとわかる”的构造就会成为如图 34-11 所示的构造。然而，若将其否定，就会成为如图 34-12 所示的构造(属性关联否定)。“はっきり”不会与否定属性有直接关联。

“かすか”这个实体也如“それがかすかに見える”所示，同样和动属性有关联(图 34-13)，但“かすか”不能与否定属性共存，所以没有图 34-12 那样的构造。

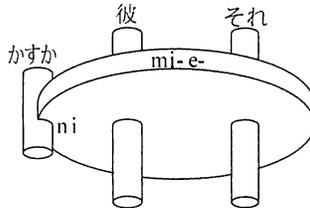


图 34-13 かすかに見える

关于“見える”的两个主体是复数主体的问题，可参照 12.4.1(2)。

以上涉及的实体可整理成表 34-1。

表 34-1

		全然	絶対	完全	はっきり	かすか	
与动属性 有关联	肯定	×	○	○	○	○	
	否定	×	×	○	○	×	属性关联否定
与否定属性有关联		○	○	○	×	×	ない关联否定

可以与否定属性直接关联的(ない关联否定)客体有“全然”“絶対”“完全”三种类型。

如表所示，“完全”类型中存在的问题是，即使发话人想以与动属性相关联的否定形式(属性关联否定)使用“完全に”说“完全にわからない。(80%はわかっている。图 34-10)”，听话人也有可能把“完全に”作为与否定属性有直接关联的形式(ない关联否定)再次构成构造：

完全にわからない。(全然わからない。图 34-8)

第 35 章 各种问题

35.1 数量实词与否定

(1) 到底是来了，还是没来？

学生は8人来ることになっていましたが，全員来ませんでした。

从这个句子中可以得知以下信息：

- 学生は1人も来なかった。
- 学生は来たが，8人未満である。

学生到底是来了，还是没来？仅通过这个有双重意义的句子是无法判定的。为什么会这样呢？

(2) 作为单一体的处理与作为集合体的处理

如果把“全員”作为一个整体，也就是单一体来处理，“全員 \emptyset_1 来ない”就是“全員というものが来ない”“1人も来ない”的意思。

如果把“全員”作为一个人一个人组成的集合体来处理，那么“全員 \emptyset_1 来ない”就会成为否定来的人数是 100%，比如“80%が来る”的语气。

当否定数量为实词(参照第 38 章)时，根据把实词作为单一体处理还是作为集合体处理的不同，句子表达的意思也有所不同。

(3) 构造图示

下面我们对构造进行考察。虽然从结果上看，两者都会成为否定构造(图 35-2、图 35-4)，但是根据过程的不同可以将其区分开来。

下图以“全員”作为数量实体(表示数量的实体)举例说明。这与“8人”等其他实体基本相同。此外，与数量实词位于格格时也基本相同[35.1(5)]。

作为“单一体”处理的“全員”

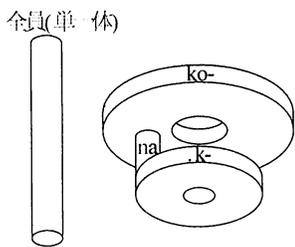


图 35-1 全員 + 来ない

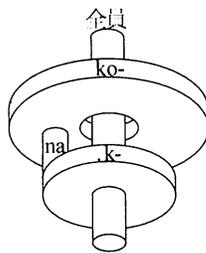


图 35-2 全員 \emptyset_1 来ない
(1人も来ない)

作为“集合体”处理的“全員”

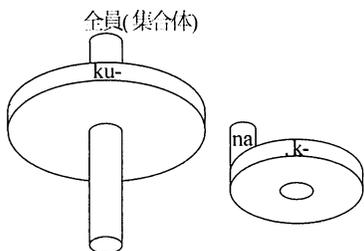


图 35-3 全員 \emptyset_1 来る + ない
(100% 来る)

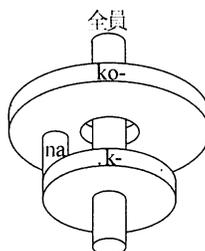


图 35-4 全員 \emptyset_1 来ない
(来るのは100%ではなく 例 80%)

然而，在下面的句子中，“全員”和“学生”都是主格。

学生 \emptyset_1 は 全員 \emptyset_1 来ませんでした。

“全員”和“学生”是时差同位格(38.2)。

(4) 否定构造的描述

描述图 35-2、图 35-4 的构造时，根据描述放置有数量实体的主格的不同，会出现不同的表层形式。如表 35-1 所示，“全員”可以有 4 种主语形式，以及根据单一体或集合体的不同处理方式所产生的 8 种(①~⑧)描述意义。(关于否定的主语的 6 种情况，参照 27.1。在这里，因为“全員”是作为对比的现象，并且选择主语需要先决定否定属性，所以没有分开处理的必要。)

表 35-1 数量实体是“全員”的时候

“全員”单一体			“全員”集合体
①	话题主语	全員 θ_1 来なかった	⑤
②	主题主语	全員 θ_1 は来なかった	⑥
③	对比主语	全員 θ_1 は来なかった	⑦
④	事象主语	全員が来なかった	⑧

下面将简单说明①～⑧。

作为“单一体”处理的“全員”—— 来た人はいない

- ① 全員 θ_1 来なかった。それで、料理はそのままになっている。
- ② (その) 全員 θ_1 は来なかった。それで、料理はそのままになっている。
- ③ (その) 全員 θ_1 は来なかった。しかし、別のグループが来た。
- ④ 全員が来なかった。それで、料理はそのままになっている。

作为“集合体”处理的“全員”—— 来た人もいる

- ⑤ 全員 θ_1 来なかった。それでも、料理はほとんどなくなった。
- ⑥ 全員 θ_1 は来なかった。(そんなに多くは来なかった。
それでも、料理はほとんどなくなった。)
- ⑦ 全員 θ_1 は来なかった。(全員ではなくて)80人ぐらい来た。
- ⑧ 全員が来なかった(集まらなかった)。が、料理はほとんどなくなった。

至于数量实体是“8人”的时候，如表 35-2 所示，与“全員”的情况一致，也有 8 种主语的形式。所以下表省略掉构造图，将图 35-1～图 35-4 的“全員”换为“8人”。

表 35-2 数量实体是“8人”的时候

“8人”单一体			“8人”集合体
①	话题主语	8人 θ_1 来なかった	⑤
②	主题主语	8人 θ_1 は来なかった	⑥
③	对比主语	8人 θ_1 は来なかった	⑦
④	事象主语	8人が来なかった	⑧

作为“单一体”处理的“8人”—— 将“8人”全部否定(8人缺席)

- ① 8人 θ_1 来なかった。それで、出席者は100人のうち92人だった。
(出席予定者が8人なら、出席者なし。)

- ② (その)8人 θ_1 は来なかった。で、出席者は100人のうち92人だった。
 (出席予定者が8人なら、出席者なし。)
- ③ (その)8人 θ_1 は来なかった。しかし、別のグループが来た。
- ④ 8人が来なかった。それで、出席者は100人のうち92人だった。
 (出席予定者が8人なら、出席者なし。)

作为“集合体”处理的“8人”——只否定“8人”(1~7出席)

- ⑤ 8人 θ_1 来なかった。(予定では8人……来たのは、例えば5人。)
- ⑥ 8人 θ_1 は来なかった。(そんなに多くは来なかった。)
- ⑦ 8人 θ_1 は来なかった。(8人ではなくて)5人だった。
- ⑧ 8人が来なかった(集まらなかった)。
 (予定では8人……来たのは、例えば5人。)

在 35.1 中，我们指出“全員来ませんでした”具有双重意义。在此，通过分析与“は”的关联，我们进一步判明了8种“全員”和8种“8人”的存在。

(5)数量实体位于客格的情况

下面简单地阐述一下数量实体位于客格时的构造。

例：彼 θ_1 は学生全員に会わなかった。

在这一例句中，“学生”和“全員”处于时差同位格，这一点将在 38.2 涉及。为易于分析，我们在观察时省略“学生”的形式。

首先，这种构造与位于主格时的构造相同，有两种。

作为“单一体”处理的“全員”

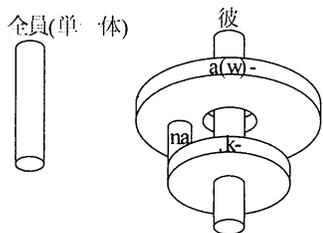


图 35-5 全員 + 彼 θ_1 会わない

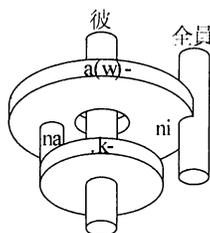
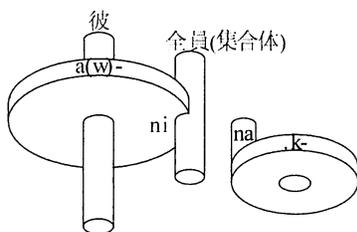
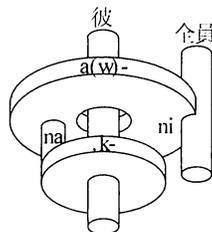


图 35-6 全員に会わない
 (1人にも会わない)

作为“集合体”处理的“全員”

图 35-7 全員に会う + ない
(100%に会う)图 35-8 全員に会わない
(会うのは100%ではなく例80%)

可以按照主格的构造考虑如何描述“全員”的否定构造。客格的情况也存在 6 种客语的形态(28.1), 但不必根据现象来对比客语和选择客语。

表 35-3 数量实体是“全員”的时候

“全員”单一体			“全員”集合体
①	话题客语	全員 に 会わなかった	⑤
②	主题客语	全員には会わなかった	⑥
③	对比客语	全員には会わなかった	⑦
④	逻辑客语	全員に会わなかった	⑧

作为“单一体”处理的“全員”—— 会った人はいない

- ① 全員~~に~~会わなかった。(会った人はいない。)
- ② (その)全員には会わなかった。(会った人はいない。)
- ③ (その)全員には会わなかった。(別のグループには会った。)
- ④ 全員に会わなかった。(会った人はいない。)

作为“集合体”处理的“全員”—— 会った人もいる

- ⑤ 全員~~に~~会わなかった。(会った人もいる。)
- ⑥ 全員には会わなかった。(そんなに多くの人には会わなかった。)
- ⑦ 全員には会わなかった。(全員ではないが、例えば80%に会った。)
- ⑧ 全員に会わなかった。(会った人もいる。)

将“全員”换成“8人”时, 可以依照 35.1 (4)(表 35-2)的情况进行分析, 在此省略。

(6) 全員来たんじゃない, 全員来たわけじゃない

以下形式可对数量进行否定:

学生 θ_1 は全員 θ_1 来たんじゃない。

学生 θ_1 は 8 人 θ_1 来たんじゃない。

这里的“～んじゃない”是要求订正一部分构造的否定形，在第 33 章中已有所涉及。“～わけじゃない”也可以依此分析。

怎样否定数量实词(将否定作为订正对象)呢? 下面我们遵循第 33 章提及的原则来考虑，并对“学生 θ_1 は全員 θ_1 来た”的推断构造进行分析。

如果遵循原则 1(如果只描述推断构造中的一个要素，它就会成为订正的对象)，只描述数量实词，数量实词就是订正的对象(要求订正“全員”)，即“全員じゃない”。

如果遵循原则 2(即使在一个要素上添加动属性，这一个要素仍然是订正的对象)，那么即使添加“来た”，数量实词也是订正的对象，即“全員が来たんじゃない”。

如果遵循原则 3(主题、话题不能成为订正的对象)，把“学生 θ_1 ”“学生 θ_1 は”放到句首，则数量实词是订正的对象，即“学生 θ_1 ，全員が来たんじゃない”“学生 θ_1 は全員が来たんじゃない”。

如果遵循原则 4(有同等资格的要素时，有强调的要素是订正的对象)，把数量实词放到强调的位置时，则数量实词是订正的对象，即“きのうここに全員が来たんじゃない”“学生 θ_1 はきのう全員がここに来たんじゃない”。

原则 5~7 不是这里涉及处理的对象，在此省略。

以上即是在遵循原则的情况下把数量实词作为否定(订正)对象的方式。

35.2 “～しか～ない”的构造

(1) 实体排除描述

3.1 中分析的“相对化描述”是把构造上的实体和其他潜在的实体进行相对关联描述的描述法。

3.1 的(2)中提到了“相对化描述 2”(排除实体的描述)，其中①中涉及了“其他实体描述”。“こそ”“だけ”“(一部分的)さえ”就具有这个机能。如以下例句所示：

彼がこそ犯人である。(“彼こそが犯人である。”も考えられる)

彼がさえ来れば、円く収まる。

彼がさえ来なければ、円く収まる。(このように否定でも使用)

使用这种描述法来描述判断构造时，具有“对于其属性来说，主体(客体)仅仅是这个判断构造中出现的主体(客体)，不是其他的主体(客体)”的含义。其构造如图 35-9、图 35-10 所示。

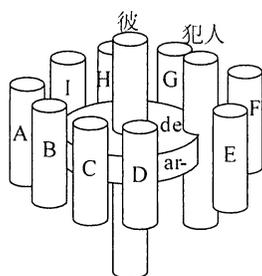


图 35-9 彼がこそ犯人である
(主体 A~I 被排除)

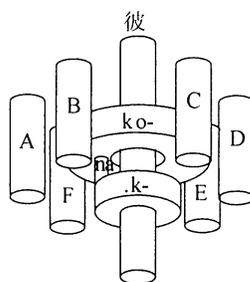


图 35-10 彼がさえ来なければ……
(主体 A~F 被排除)

(2) “~しか~ない”的“しか”

“しか”如“彼がしか来ない”所示，一定用于否定，并且排除其他实体。

那么，它与“さえ”等一样吗？实际上并非如此。

在“彼がさえ来なければ……”中，他被假定为“来ない”。但是在“彼がしか来なければ……”中，他却被假定为“来る”。

所以，“しか”的构造不是图 35-10 所示的构造。图 35-10 表示的是他“来ない”。

那么，“しか”的构造是什么样的呢？

从“彼がしか来ない”中，我们可以观察到拥有“来ない”这一属性的不是“彼”自身而是“他实体”。“彼”自身并没有“来ない”这一属性。也就是说，“来ない”这一属性并不是排除“他实体”，而是排除“彼”自身，即“自实体”。

“こそ”“だけ”“(一部分的)さえ”排除“他实体”，与此相反，“しか”排除“自实体”。

(3) “排除自实体”的构造

在“彼がしか来ない”中，拥有“来ない”这一属性的是“彼”以外的全体人员，因为“彼”自身有“来る”这一属性，所以这件事的构造可以用图 35-11 表示。

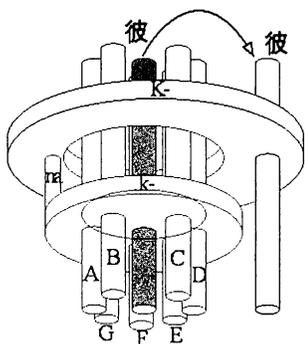


图 35-11 彼がしか来ない
(A~G是“来ない”。仅排除自实体“彼”。)

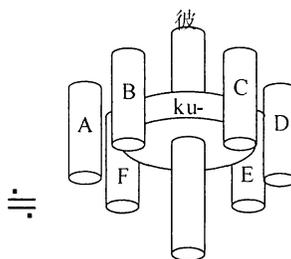


图 35-12 彼だけが来る
(排除他实体)

图 35-11 中拥有“来ない”这一属性的是实体 A~G, “彼”则没有这一属性, 从这个主体群中脱离。图中将实体涂成深色表示“脱离”的意思。脱离后其单独成为肯定主体。这就是主格中“~しか~ない”的构造。

尽管在语气上有所不同, 这里形成的构造(图 35-11)在意思上和“彼だけが来る”的构造(图 35-12)基本相同。

(4) 客体时的构造

在“彼はマンガをしか読まない”的句中, “彼”读的客体不是小说、教科书或报纸, 只是“マンガ”。属性“読まない”的客体是“マンガ”之外的所有读物, 而属性“読まない”排除了“マンガ”。这是排除“自实体”的构造。

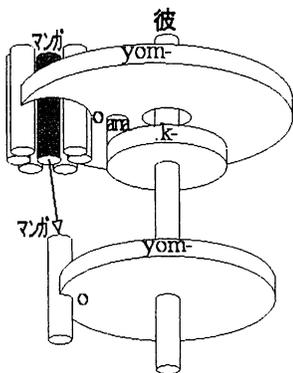


图 35-13 マンガをしか読まない
(排除自实体)

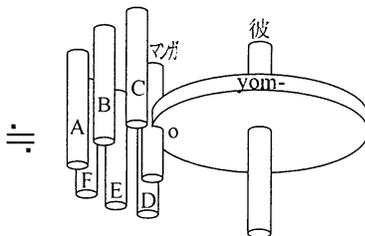


图 35-14 マンガだけを読む
(排除他实体 A~F)

在构造图示中, 把包含“マンガ”的实体搁放到“読まない”的客格(を格)

中，然后把相当于“マンガ”的实体抽出后，把这个实体放到“読む”的客格(を格)就可以。

在不考虑语气的条件下，这里形成的构造(图 35-13)和“マンガだけを読む”的构造(图 35-14)在意思上基本相同。

35.3 “降りはしない”的构造

“降る”的否定是“降らない”，这个构造在第 26 章中已经说明。这里分析的是“降りはしない”这一形式的否定构造。

“降り”是动属性的实词化(9.2)，也就是名词，“しない”是“する”的否定。“降り”和“する”的关系是实体和动属性的关系，所以两者之间应该存在格的关系。那么就应该类似于“落下をする”，成为“降りをする”的形式(图 35-15)。(但在用于肯定时，则会成为表示相对化的“降り \emptyset はする”。)

如果否定它，该句则成为“降りをしない”。通过把“降り”主题客语化(把“は”修饰成深色，省略掉“を”)，可以得到“降りをはしない”(图 35-16)。

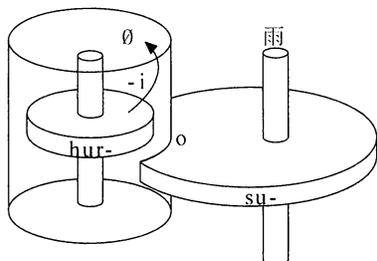


图 35-15 降りをする

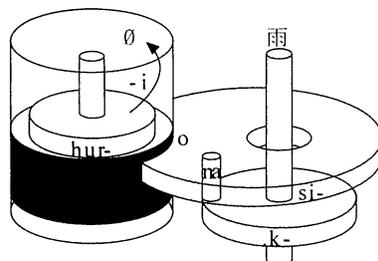


图 35-16 降りはない

“(雨は)降りはない”是上述构造。

“降りもしない”是把相对化描述“は”的修饰替换成伴随“も”的他实体描述[3.1(1)]后得到的形式。这种句子是伴有责备的否定。

35.4 “～することはない”的构造

对于加入到包含实体中的否定(35.3)，我们也可以使用上述方法进行分析。“降ること \emptyset はない”的构造如图 35-17 所示。

然而，“君が行くことはない”这样的句子含有“必要がない”的意思。其构造如图 35-18 所示，构造中保留了“必要”这一实体。这个实体虽然没有被描述出来，但是听话人会将其当作理所当然的事把它再现。(然而，初学日语的人则做不到。)

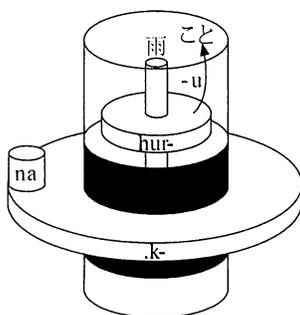


图 35-17 雨が降ることはない

“君が行くこと”是本主体，“必要”是属性主体(19.2)。

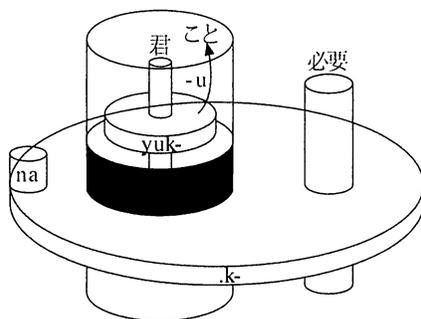


图 35-18 君が行くことは(必要)ない